

「かやぶき屋根」ってなんだろう？

「かや」とは、実は一つの植物の名前ではありません。ススキ、ヨシなど、背が高く、クキの中が空洞の植物のことをまとめて「かや」とよびます。屋根を板や草などでおおうことを「葺く」というため、「かやぶき屋根」といいます。府中では多摩川や野原に生えていたチガヤ、ススキ、オギなどをつかいました。

2017年(平成29)に行った、旧越智家住宅のふきかえでは、近くに「かや」をたくさん刈れる場所がなくなっていたので、富士山のふもと(山梨県・静岡県)や渡良瀬遊水地(栃木県・群馬県・茨城県・埼玉県)のものをつかいました。長さ2m以上、直径20～25cmくらいを1束にまとめて、たくさん運んできました。

建物の大きさや職人の数にもよるけど、かやぶき屋根のふきかえは、1か月以上かかることがあるニャ。時間がたてば土に還る材料だから、環境にやさしい屋根だニャ。



農作業が少ない冬に「かや」を刈るニャ。むかしは毎年少しづつ「かや」を刈り集めて、ふきかえにつかえる量がそろそろまでためておいたんだニャ



重ねた「かや」の束

竹と木で組んだ下地

杉皮

かやぶき屋根のメンテナンス

「かや」には水を通しにくい性質があります。かやぶき屋根は、竹や木を組んだ下地に「かや」の束を何層も重ねてふきます。ですから、穴があかなければ雨もりすることはありません。「かや」を食べる虫や引きぬく鳥は、火やケムリがきらいなので、毎日家の中で薪をつかって火をたいていると屋根は長持ちします。

屋根にコケやキノコが生えたり、鳥に「かや」が引きぬかれたりして形がデコボコしてきたら「さしがや」という部分修理をします。それでも、20～30年くらいで全体をふきかえる必要があります。むかしは府中にもかやぶき屋根をふく職人がいましたが、現在は東京都内になくなってし

まったため、栃木県や宮城県など、遠くから来てもらう必要があります。



現在、燃えやすいかやぶき屋根の家を新しく建てることは、府中市内ではほぼできないんだ。だけど、博物館ではむかしの技術を保存していくためにも、かやぶき屋根の建物をこれからも守っていくよ！

府中市郷土の森博物館

〒183-0026 東京都府中市南町 6-32
[TEL] 042-368-7921
[H P] <https://www.fuchu-cpf.or.jp/museum/>



1954年(昭和29)に府中町、多磨村、西府村が合併して府中市が誕生した時、市内には約5万人がくらしていました。それが2025年(令和7)には約26万人と、5倍以上にふえています。

市内には住宅地がふえ、そのかわりに田んぼや畑はどんどん姿を消していきました。それとともに古い家は建てかえられ、かつて市内のあちこちにあったかやぶき屋根の民家もなくなっていきました。1960年代に府中市が行った調査でも、かやぶき屋根の民家はすでに32棟しか確認できず、

越智さんがくらしていたころの越智家住宅(1972年)

1980年代前半にはほぼなくなってしまいました。残っていた建物の中でも古い形式を残している民家として博物館で保存することになったのが、旧越智家住宅です。

越智家は郷土の森博物館近くの芝間(南町)の農家です。建物は江戸時代に現・稲城市に建てられ、1889年(明治22)に移築されたもので、芝間で1973年(昭和48)までつかわれていました。



1968年頃の越智家

左の図に「母屋」と書いてあるところが、解体前の越智家住宅ニャ！母屋の周りにもいろいろな建物があったニャ。自宅のすぐ近くに用水路があり、近くの田んぼに水をひいたニャ。



府中市郷土の森博物館



再現されたハケ下

郷土の森博物館では、園内にハケを再現してハケ上とハケ下をつくっています。

かつて農家の多くは、「カシグネ」と呼ばれる生垣（防風林）に囲まれていました。その外に畑、畑の先に用水路、用水路の先には田んぼ、その先には落ち葉を集めるための雑木林がありました。旧越智家住宅付近では、こうしたハケ下の風景を再現しています。



5月の連休には鯉のぼりも泳ぐ



カシグネ（左）に囲まれた旧越智家住宅

ハケ下ってなに？

府中市にはハケ（府中崖線）と呼ばれる崖が東西にのびています。それを境に、標高が高い土地と低い土地に分かれています。

大國魂神社や京王線府中駅がある「ハケ上」には、畑や雑木林が広がっていました。長い時間をかけて多摩川の流れにけずられた南部は「ハケ下」と呼ばれます。ハケ下には多摩川から水を引いた用水路がはりめぐられ、田んぼが広がっていました。用水路には、粉ひきや精米するための水車小屋もありました。



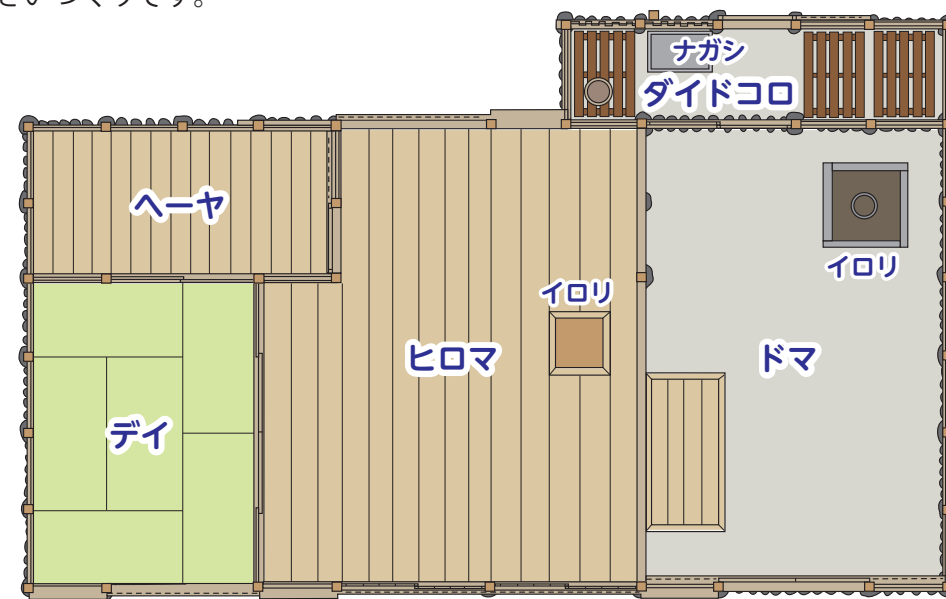
府中の農家は、冬になると雑木林に行って落ち葉を集める「くずはき」をしたニャ。竹カゴに合計 100 ぱいぶんくらいくさひりょうの落ち葉を持ち帰って腐らせ、肥料として使うのだニャ。府中に限らず、対岸の多摩丘陵たまきりゅうに行くこともあったのニャ。雑木林も農家にとって大切な存在なんだニャ。

農家には農作物を干したり麦や豆の殻をとったりする広い作業場所が必要だったので、カシグネの中には畑をつくらなかったんだ。干している作物が風で飛んでしまうのを防ぐのにもカシグネは必要だったんだ。敷地が広いのにはちゃんと理由があるんだね。



越智家の室内

この家が建てられたころは、作業や料理をするドマ、ダイドコロ、もっとも広いヒロマ、せまいヘーヤ、畳をはったデイだけだったと考えられています。「ハケ上の農家」として博物館に復元された旧河内家住宅より小さいつくりです。



復元された旧越智家住宅の間取図



ヒロマに再現されたイロリ



左の写真は 1973 年（昭和 48）、解体直前の越智家のドマの様子ニャ。料理するためのイロリやカマドがあり、その上にカマドの神様がまつられていたニャ。ちなみにこの時、ヒロマのイロリはすでになくなっていて、テレビが置かれる場所になっていたのニャ。



現在、旧越智家住宅の内部は、さいしょに建てられたときはこんな間取だったんじゃないかニャ？と想像して再現されているニャ。でも、よく分からないところや展示資料は解体されたころの昭和のくらしをもとにしているニャ。どちらにしても、今は見ることができないくらしの風景ニャ。建物は時代にあわせてリフォームされたけれど、家の人が愛情をもってキレイに使っていたから、むかしの姿に復元することができたのニャ。むかしあたりまえにあったのに、いつのまにかなくなってしまうものを残しておくのは実はむずかしいことだと思うニャ。しかも高級じゃなく、一般的な建物が残されているのも、とても貴重なことなのニャ。

